讀賣新聞 2010.9.28 （第3種郵便物認可）

梯久美子の廃線紀行

次世代交通 夢の残骸

姫路市モノレール（兵庫県）

姫路市を訪ねるのは初めてだった。「白鷺城」の別名がある世界文化遺産の姫路城は現在修復工事中で、その美しい天守閣を見ることはできなかったが、正直に言えば、それほど残念ではなかった。この街には廃線マニアにとって一見の価値がある、もうひとつの「遺産」が存在するのである。昭和41年（1966年）から49年まで運行していた姫路市モノレールの遺構がそれだ。

このモノレールは昭和41年の姫路博覧会に合わせて開業し、姫路駅から博覧会会場の手柄山までを結んだ。当時、モノレールは次世代の都市交通機関として注目されていたが、姫路市モノレールの場合は、全長が約1・6キロと短かったことや、通勤や通学の足となり得ないルートを取ったことなどから、博覧会が終わった後は利用者が激減。わずか8年で運行を取りやめ、その後、昭和54年に正式に廃止となった。

姫路市モノレールがマニアの心をくすぐるのは、モノレールの桁や支柱が撤去されないまま、街のところどころに残っているからだ。あちこちで出くわす黒々としたシルエットには、異界に踏み込んだような気持ちにさせる不思議な魅力がある。

姫路駅から廃線跡に沿って西方向に歩き出すと、ビルの間に突如として黒くすすけたコンクリートの支柱が姿を現す。かつては長く延びていたレールの桁が、中空でちぎれたように途絶えている光景は、不気味と言えば不気味だが、どこかシュールで面白い。

唯一の途中駅だった大将軍駅は、かつて10階建てのビルの3階にホームが設けられていた。ビルの中をモノレールが突き抜ける構造になっており、当時としては未来都市のようなイメージだったに違いない。ビルは健在で、中をつらぬくレール桁も残っている。外から眺めていると、高度成長期に日本人が見た夢の残骸のように思えて、切ないような懐かしいような気持ちになった。

大将軍駅を過ぎるとレールは左に折れ、船場川に沿って南西へ向かうルートを取る。川のほとりには、かなり長い距離にわたっている部分があり、対岸にはレンガ造りの古い工場が岸に沿って建っている。赤いレンガの壁と、黒いレール桁が川をはさんで向かい合っている風景には独特の美しさがある。

船場川のほとりに残る支柱とレール桁。古代遺跡のような風格がある＝筆者撮影

多くの遺構が残っているのは撤去に莫大な費用がかかるためで、やむを得ずこうなっているのだが、船場川べりで会った60代の地元の女性は「もう見慣れているから、別に気にならないねえ」と言っていた。

この女性と立ち話をした場所のすぐ近くに、数本の支柱がそびえ立っていた。レール桁はやはり中空で途切れているが、蔓性の植物に覆われ、まるで古代の遺跡のように見える。旅人の身勝手かもしれないが、やはりこれはこのまま残しておいてほしい気持ちになってしまう。

終点の手柄山駅は、水族館やスタジアムなどがある手柄山公園の敷地内にあった。お城のようなデザインの建物の中にホームがある観光駅で、長く閉鎖されてきたが、現在、隣接する水族館のリニューアルに合わせて改修工事が行われている。来春には駅ホームとかつての車両が公開される予定があるという。

（ノンフィクション作家）

（次回は10月23日に掲載）